

論文

環状盛土遺構を有する遺跡の解釈

高梨俊夫

千葉県立中央博物館

〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2

1 はじめに

1993(平成5)年、栃木県小山市の寺野東遺跡で発見された縄文時代後期から晩期に形成された環状の土の高まりは環状盛土遺構と呼ばれ、その後、関東を中心に類例が知られるようになり、その遺構の解釈についても議論が展開されてきた。

特に議論の中心となったのは盛土の形成過程の要因と性格の解釈である。これまでの代表的な解釈は、大土木工事による巨大祭祀遺構(勅使河原彰 1995、小林達雄 1995)と集落(堀越正行 1995、阿部芳郎 1996、江原英 1997・1999)である。

集落説を唱える研究者のうち堀越正行・阿部芳郎・鈴木正博は、環状盛土遺構の呼称を否定し、「中央窪地型環堤集落」(堀越 1995)、「遺丘集落」(「谷奥型環状遺丘集落」・「谷面並列型遺丘集落」)(阿部 1996)、「環堤土塚」(鈴木 1994)と呼んでいる。ただ、江原英は、集落説をとりながらも環状盛土遺構の名称の正当性を主張している(江原 1997)。

阿部芳郎は、佐倉市曲輪ノ内貝塚の調査において、盛土の中で建物跡の検出をし、盛土遺構は「居住活動による生活面の累積であることを明らかにできた」とし、「遺丘集落」の遺丘が形成される要因のひとつとして、「土壁家屋の成立と共に残滓の廃棄面を土壌で覆い新たな生活面をその上に更新するという行為が連続的に介在した可能性を指摘したい」としている(阿部 2005)。また、「祭祀遺構か集落かという二

者択一的な性格の判断や新概念の提示にあるのではなく、考古学的な手法にしたがった実態の解明にある」(阿部 2007)としている。

筆者も阿部芳郎のいうように考古学的な手法にしたがった実態の解明が正確にされていないというのは同感である。また、祭祀遺構か集落かの二者択一の判断は難しいのではないかと思っている。それは、祭祀遺構と集落は分類上の同じ階層にないからである。集落の概念は広く、祭祀遺構は集落に包括される場合があるため、集落内の機能論で考えられるものだからである。比較するなら、生活遺跡(集落)か祭祀遺跡(祭祀場)かである。しかし、目的を持って構築されたものか、結果として形成されたものかは判断できている。馬場小室山遺跡の調査例では、生活面の累積によるものと解釈されているが、明らかに人為的な盛土がマウンド内に認められる井野長割遺跡の例や、これまでの竪穴住居の構造上の感覚では古墳状のマウンドは形成され得ないと考えられる。また、三直貝塚では斜面盛土は認められるもののマウンド上の盛土は認められていないにもかかわらず、環状盛土遺構と視覚的に捉えられるのは、盛土に抛らない地山整形を行っているからであり、盛土を問わず環状の高まりを形成するスタイルにこそ意味があることを物語っていると思えるのである。そこで、なぜ、縄文時代後晩期の遺跡に環状盛土遺構が存在するのか解明するために、遺跡の実体解明をとおして環状盛土遺構を有する遺跡の解釈をしたい。

2 調査例の概要

環状盛土遺構を有する遺跡の発掘調査の事例から盛土の形成過程および遺跡の特徴について報告書等の記載から確認し、これまでの論考と想起された問題を抽出したい。

(1) 寺野東遺跡 (栃木県小山市)

江原英(江原 1997)によると、盛土の形成時期は、堀之内1式～安行3b式期であり、後期安行式期には、相応の高まり＝盛土遺構の景観が形成されていたと考えられているが、盛土の形成時期の決定を盛土層に包含された主体をしめる土器型式で行っているため、実際の形成時期と違う可能性があることが指摘できる。盛土の時期決定は、包含する一番新しい土器型式で行うべきであり、断面図(江原 1997: 第242図 t13 土層断面図・遺物出土状況図)に示され

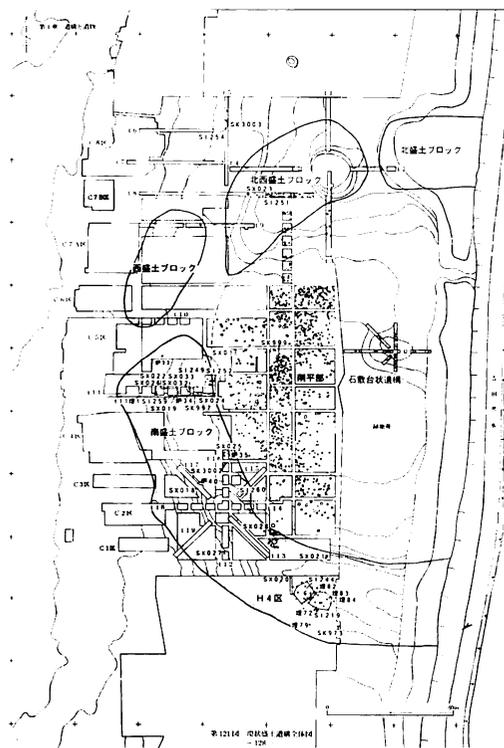


図1 寺野東遺跡環状盛土遺構全体図
(江原 1997 から転載)

た遺物の出土位置を見ると、盛土の下層から晩期の土器が出土しているような例もあるので、盛土はその晩期以降に開始されたとみるのが原則ではないだろうか。ただ、盛土内に捕捉できていない遺構が多数存在し、盛土下層まで達する掘り込みをもつ晩期の遺構の存在する可能性もある。この見方で推測すると加曾利 B2 式～安行1式土器が量的に多いことから窪地部分にこの時期の住居跡等の遺構があり、遺構覆土ごと削られて盛土されたことも否定できない。

後期中葉以降晩期前葉まで、遺物量の多さとは逆に、遺構数が減少し集落の姿が明瞭ではなくなることを確認でき、明瞭な形で残される住居跡等の遺構が少ないまたは殆ど認められない点が、環状盛土遺構の特徴と言える、としているが、この原因はトレンチ調査が多く、面的な調査が盛土上でなされていないことにあると思われる。

墓及び貯蔵施設がない。というのは、遺跡の性格を考える上で重要な点である。

櫃原式文様を有する鉢形土器の出土や、称名寺式期に九州の阿高式系や西日本系の異系統土器が出土しているなど、伝統的に他地域との接点が認められる。

遺跡の性格について、調査・報告者の認識は、状況証拠に負う部分が多いが、集落の一形態であるとしている。

(2) 三直貝塚 (千葉県君津市)

環状盛土遺構のほぼ半分を面的に発掘調査された重要な事例である。

吉野健一(吉野 2006)によると、盛土の時期別特徴は、堀之内式期～加曾利 B 式期には丘陵上面を削平し、斜面に投棄、加曾利 B 式期以降は、丘陵上面を削平し、斜面や谷部に投棄、安行式期以降は、丘陵上面の地形改変が行われ、斜面や谷部に投棄している、としている。

土器分布については、加曾利 E 式・堀之内式の分布は重なり、縁辺～斜面、北側貝層周辺・南側斜面に集中する。加曾利 B 式・後期安行

式の分布は重なり、盛土部分～縁辺～斜面、北側貝層周辺北東側盛土縁辺に集中する。晩期安行式は、中央部～盛土部分、北側貝層上ピット群・北東側盛土～盛土内側に集中する。中央窪地及びその周辺では晩期のものがほとんどであり、晩期末葉の荒海式までである。

人骨出土遺構については、北側貝層下で4か所、5Dグリッドで1か所、計8体以上、成人男女が確認されており、時期は加曾利B式期の可能性が高い。人骨出土遺構周辺は、晩期安行式期まで土器分布が密集する。

高まりの部分的に切れる場所の成因と形成時期について注目した。

ローム層上面の地形を見ると調査範囲の3か所に高まりの途切れる低くなった部分が存在する。これは、ローム層の地山が人工的に掘削されて形成されているものである。また、これは、この場所の自然地形を考慮した場合、南から延びてきた尾根を横断的に切断した（中世城郭の堀切のようなもの）ものである可能性が高い。

南側の切断か所（仮称通路1）は、SI-002（安行3a式期）住居跡を削平しており、東側の切断か所（仮称通路2）はSI-011D（安行2式期）住居跡を削平していることから、おそらく晩期のある段階で通路が形成された可能性が高いと予測している。また、通路2を先行して開削し、第2段階として通路1を開削した可能性がある。通路1の隣接斜面には階段遺構SX-021（安行2式から安行3a式期）があり、通路2の延長線上斜面に道跡SD-001がある。さらに、この北側斜面には道跡SD-030（安行1式期以降）が検出されていることからこの延長上にも通路入り口の存在する可能性が高い。

このことから、加曾利B2式期以降、安行3a式期まで、尾根上に集落が展開した後、尾根を切断し、集落を窪地周辺に移す傾向がある。これは、後期から継続する集落が晩期になって性格が変質したことを示すのかもしれない。

後期安行式期から晩期まで、同じ位置に4回

以上立て替えられている住居SI-004Bの性格については検討を要する。SI-004Bは、丘陵切断開削された想定通路の脇に位置する方形の比較的大型の住居である。また、同様の形態で同規模の住居SI-022Aが、もうひとつ北側の想定通路の脇にも存在する。来訪者のための入り口をサインする目印的な建物であったり、異形台付土器・ミニチュア土器・土偶・土製耳飾・土製および石製の玉類・石鏃などが目立つため、特殊な性格の住居であるのかもしれない。

マウンドの高まりの下には大型住居（SI-022A、SI-004B）が検出され、しかも遺跡では、一番新しい時期のものである。なぜ、一番新しい時期の住居跡の上にマウンドが形成されるのか。覆土の大半を占める黄褐色土はソフトロームに類似し、人為的埋め戻しがされている。盛土遺構の正体は、晩期段階における居住域の区画、住居の建設、廃棄・埋め戻しの結果である可能性がある。

居住域の区画は集落内の場所の規制を維持するためのものであり、同じ位置に何度も建築された住居は特定機能を担っていたことが想像される。

調査区で一番新しい晩期中葉において、方形堅穴住居と円形平地式住居に建物構造の違いが

時期	遺構															
加曾利EⅢ																SI036
加曾利EⅣ																
称名寺Ⅰ	SI039	SI042	SI044	SI053	SI054	SI055	SI005								SI051	
称名寺Ⅱ																
堀之内Ⅰ																
堀之内Ⅱ	SI049	堀之内Ⅰ式以前は盛土遺構の下から検出されている(削平されている)														
加曾利BⅠ	SI027															
加曾利BⅡ	SI028															
加曾利BⅢ	SI019															
曾谷	SI032															
安行Ⅰ		SI038	SI034		SI010	SI018	SI007									
安行Ⅱ																
安行Ⅲa		SI016	SI002		SI017	SI029	SI041									
安行Ⅲb・姥山		SI010														
安行Ⅲc・前浦Ⅰ		SI008	SI033		SI027											
安行Ⅲd・前浦Ⅱ	SI006	SI026														
千網																
荒海																

図2 三直貝塚時期別住居跡数

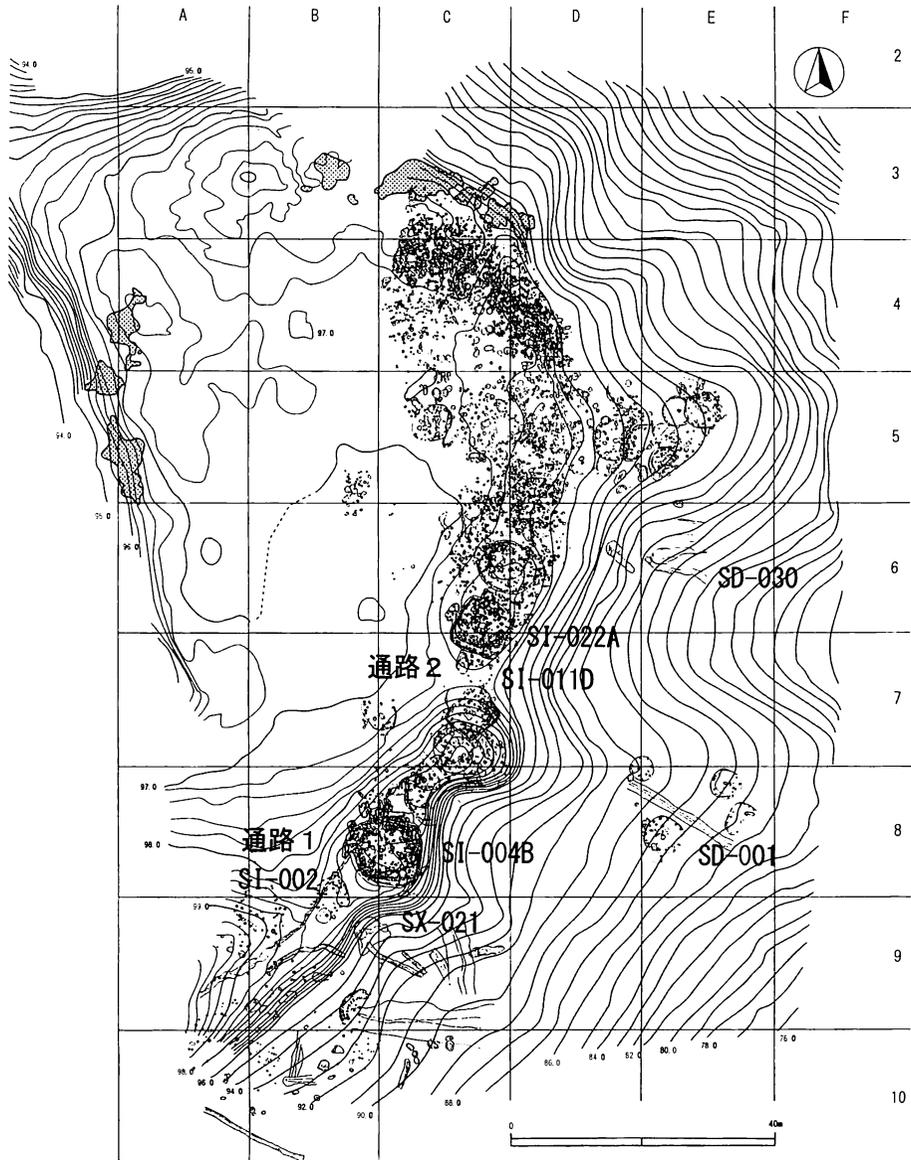


図3 三直貝塚遺構配置図（吉野 2006 から加筆転載）

見られる。機能の違いだろうか。円形平地式住居はマウンドの内側に分布する傾向がある。

三直貝塚の画期は、後期安行2式期の大型住居（SI-004B、SI-022A）の建設にある。晩期安行3b式期まで同じ場所に立て替えを経ながら建設され続けた住居の存在は、世代を超えて

集落を維持・運営してきたリーダーのいる集落＝拠点集落を意味すると考えられる。

晩期の遺物集中地点には、姥山Ⅱ式、姥山Ⅲ式、大洞式、安行3c式、前浦式土器、人面付き土器、円板形土版、石棒、独鈷石等が出土している。

予想される盛土遺構形成過程と遺跡の消長は、(1)堀之内式期に斜面部の盛土開始、丘陵上面中央部の削平・縁辺部の整地。(2)加曾利 B 式期に丘陵上面縁辺部の斜面盛土開始、北側に埋葬施設の構築・貝層の形成。(3)曾谷～安行 1 式期に丘陵上面中央部の削平・盛土の継続と丘陵上縁辺部に住居の構築。(4)安行 2～3 a 式期に丘陵上面中央部の削平・盛土の継続と丘陵尾根の切断開削によるマウンドのブロック化と斜面部に道の造営、丘陵上縁辺部に住居の構築。(5)安行 3b、姥山 II・III、前浦式期に中央窪地周辺及び丘陵上縁辺部に住居の構築。(6)荒海式期に中央窪地及びその周辺に遺物のみ残す。

住居数のわりに遺物が多い状況は、他集落からの持ち込みの可能性が高く、しかも長期にセンター機能を持った集落といえる。

後晩期をとおしての居住・埋葬・祭祀の場であり、拠点集落の要素が窺える。

(3) 井野長割遺跡 (千葉県佐倉市)

田中大介・小倉和重 (田中・小倉 2004) によると、南北約 160m、東西約 120m、5つのマウンドから構成され、マウンドの最高所の標高は、28m 程度で近似する。環状盛土は東側谷部から西側に向かって高くなっている。

各マウンドの下から後期前葉 (堀之内式期) から末葉 (安行 2 式期) の住居跡や土坑などが密に分布している。

後期の遺構の上に形成されたマウンドも、おおむね後期の遺構配置を踏襲するようなかたちで配置されている。

マウンドの形成年代は、上限を後期末頃、ローム質黄褐色土を盛土層とするマウンドは晩期前葉以降と考えられている。

マウンドの間に向かう道状遺構が検出されている。

窪地部分では、晩期の土器が地山ローム面に貼りつくように出土し、脆弱化していたことから、晩期の段階ではローム面が露呈していたに等しい状況が想定されている。

マウンド部分には住居や土坑が存在するとともに様々な遺物が出土し、貝塚や土器塚が形成されていることから、そこが居住を伴う日常的な生活場所であり廃棄場所の一つであったとしている。

窪地部分では、三輪野山貝塚の大石の存在や祭祀系遺物の多量出土、焼獣骨片の集中出土等にみられるように、祭祀・儀礼的な活動が展開されていたと推定している。

第 2 次調査時にローム質黄褐色土が、マウンドを構成する主体層として凸レンズ状に堆積しているのが確認されている。マウンド頂部での最高厚は、約 1.3m である。

田中大介は以下のような考察を行っている (田中 2004)。

道状遺構は集落形成当初から終焉まで道として機能していたようで、マウンドもこれを避けて形成されたようである。つまり、この道が集落の各施設およびマウンドの配置を規制していたとも言えるとしている。

ローム質黄褐色土を利用したマウンドの形成も晩期を中心に行われたと考えている。

東側斜面部の谷は、晩期に大量のローム質黄褐色土で「埋め立て」られ、台地平坦面を拡張することにより環状構造を維持したと想定されている。

マウンド 5 (M5) の調査によって、マウンド下から堀之内期と加曾利 B 式期の住居跡、加曾利 B 式期の土器塚が検出された。ローム質黄褐色土は、これらの遺構を覆い、マウンド全体を覆う。この土層上面から掘り込まれた遺構は検出されていない。盛土は晩期を中心に行われたと考えられている。

マウンドによって、構成される土層が異なる可能性が指摘されている。M5 のようにローム質黄褐色土という盛土によって形成されたマウンドが確実に存在する一方、M2 (7) の一部のように、現状では盛土と認識しがたい事象によって形成されるマウンドも存在する。つまり、同

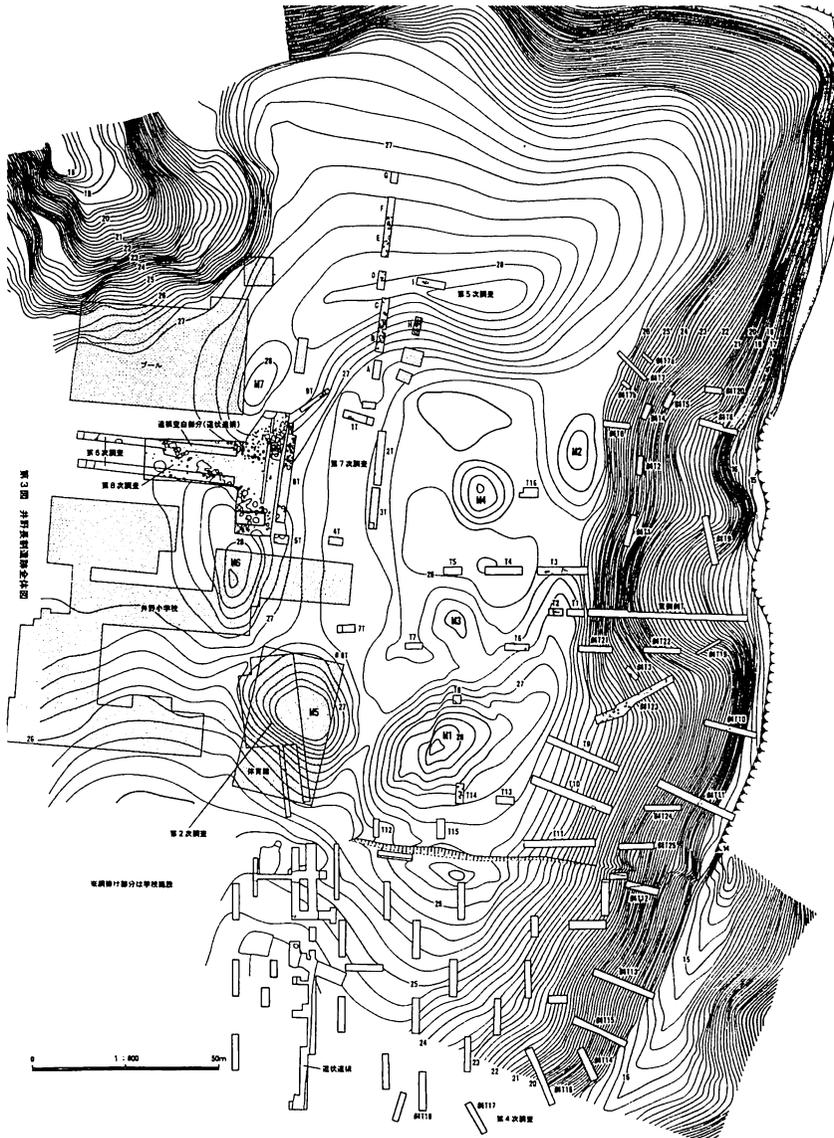


図4 井野長割遺跡全体図(田中・小倉2004から転載)

じ遺跡内でもマウンドの構成要素及び形成過程が異なるようなのであるとしている。

環状盛土遺構の形成過程の一般化および普遍化は現状ではありえないものと考えられている。

筆者は、盛土の形成要因を一般化することに意味はなく、形成された盛土の客観的な形成過

程を考えるべきであると思っている。例えば、古墳は、完全な盛土で形成されたものもあれば、地山を成形しただけのものもあり、地山成形と盛土の複合したものもある。これらは、高まりを造るという目的は同じであり、この理論で環状盛土も理解すべきものとする。

また、戸谷敦司は以下のような考察を行っている（戸谷 2004）。

環状盛土遺構は本来的には「中央窪地遺構」であり、盛土をいかに大きく築くかというよりも、中央窪地からの視覚的高低差が重要だった。中央窪地の掘削状況、盛土の形成状況は、中央窪地からの視覚効果が得られていれば、問題ではなかったために遺跡間で差がある。例えば中央窪地が自然地形であったとしても、そのような遺跡立地を選択・継続利用した意味・意義が同じであれば、中央窪地を掘削した集団としなかった集団の間に大きな差はない。環状盛土遺構が一元的な性格なのではなく、あくまでも集落・生活の延長線上に構築されたものでありながら、もう一つの側面として、集落内部からの外界に対する視覚的遮断効果があり、その背景にある何らかの意図として領域観念や祭祀性があつたと考えられる。

また、遺跡形成当初には中央窪地は存在しなかった可能性さえあるとの指摘もしている。

盛土・埋め立てに使われたローム質土には他の土質が含まれないにもかかわらず、様々な時期の土器は多量に含んでいた。これは本来、遺構のあつたローム層を遺構に含まれる土器ごと削り、再堆積させたからである。

窪地部分に遺構がないのは、本来あつた遺構を削り取った結果である。

以上に対し筆者は、井野長割遺跡のようなタイプの環状盛土遺構を有する遺跡には、二重構造が読み取れることを指摘したい。後期から晩期初頭には集落居住域であり、晩期前葉から中葉においては祭祀場となる二重構造である。また、中央窪地・環状盛土の形成は晩期になってからであり、環状盛土は土堤状に均一に一周するのではなく、低い部分の切れ目を持ち、いくつかのマウンドで構成される。マウンド間の低い部分とそこをとおる道は、外部との関係性をもっていたことも物語る。これには、晩期祭祀関連遺物の出土量を確認する必要があり、住居

の数に比べて遺物が多い理由は、後期の遺物が多ければ、中央部分の遺構が破壊されたため、晩期の遺物が多ければ、祭祀行為に伴う特殊遺物か一時的な来客用のための遺物の可能性があると思っている。

小倉和重は、出土遺物で異形台付土器や石棒などの特殊遺物ばかりが目されているが、一般生活を窺わせる粗製土器も一定量出土しており、環状盛土＝特殊祭祀遺構と単純に結論付けるのは性急であるとしている（小倉 2006）。

筆者は、このような考えをしていたら何も解明されないと思っている。なぜ、特殊なのか、特殊遺物の存在価値を重視すべきであり、粗製土器の一定量の出土を一般生活の根拠とするのも危険である。祭祀行為をどのようなものだと思っているのかわからないが、饗宴は祭祀に不可欠であり、集落構成員、来客をも含めて大宴会を開くために調理具である粗製土器の一定量の出土を祭祀行為に必須なものとして評価する立場である。また、集落概念を確認したいと思っている。集落とは居住域を必須要素として墓域、集会場、祭祀場、生産域（栽培・農耕の場合）などを含んだ生活領域の概念だと思っている。これが、時代的に墓域や祭祀場が独立する場合がある。「中央窪地型集落」は最終形態での曖昧な概念であり、集落の内容を規定した上でなければ、遺跡の本質を表現できない。だから、集落か祭祀遺構かなどの二者択一な一元的な考えになってしまうのである。居住域中心から祭祀場へと変化したことを考えたい。また、後期の墓は、三直貝塚で加曾利 B 式期のものが確認されているが、井野長割遺跡では曾谷式期のものが確認されている。しかし、晩期の墓はない。晩期の墓は三輪野山貝塚の中央窪地北側の半島状高まり縁辺部で検出されている。このことから、井野長割遺跡の内側のマウンド周辺部に存在する可能性を考える。また、寺野東遺跡の窪地内に削り残した集石部分に墓がある可能性が推測される。

(4) 三輪野山貝塚 (千葉県流山市)

小栗信一郎ら (小栗ほか 2008) によると、貝塚は5ブロックあり、第1貝塚は加曾利 B3 式期から安行 2 式期、第2貝塚は加曾利 B3 式期か安行 1 式期、第3貝塚は加曾利 B 式土器主体、第4貝塚は加曾利 B 式土器主体、第5貝塚は後期斜面盛土を構成する一部として加曾利 B1 式期から加曾利 B3・曾谷式期、晩期には遺構内貝層のみでヤマトシジミ 1 種に限定される。

後期の墓坑は、貝層下から堀之内 1 式期・2 式期、後期前葉末～中葉、晩期の墓坑は、中央窪地北側高まり周辺で 2 群、晩期前葉である。

後期斜面盛土は、堀之内 1 式期に伐採と斜面整形を行い、その上に暗褐色土の均質な土を盛る。加曾利 B 式期～後期安行式期に盛土行為

が活発化。加曾利 B3 式期～曾谷式期では盛土を抉るように削平、直後の土層には大型土器片と繊維状の炭化物を含んだ特異的な黒色土層が認められた。斜面盛土を掘り込む堀之内 1 式期～安行 3d 式期の遺構が検出されている。

晩期斜面盛土は、晩期前葉に斜面整形と環状盛土の一部開削により、道路状遺構を造営したが、晩期中葉の短期間で再び埋め立てられた。中央窪地出土の土版との接合資料がある。

斜面盛土の調査により、中央窪地と環状盛土を併せ持つ中央窪地型環状集落であることが明らかになった。

谷部遺物包含層では、堀之内 2 式土器の出土が目立つ。

面的貝塚の形成は後期、窪地を囲むように配置、斜面盛土も形成され、斜面部平坦面拡張に

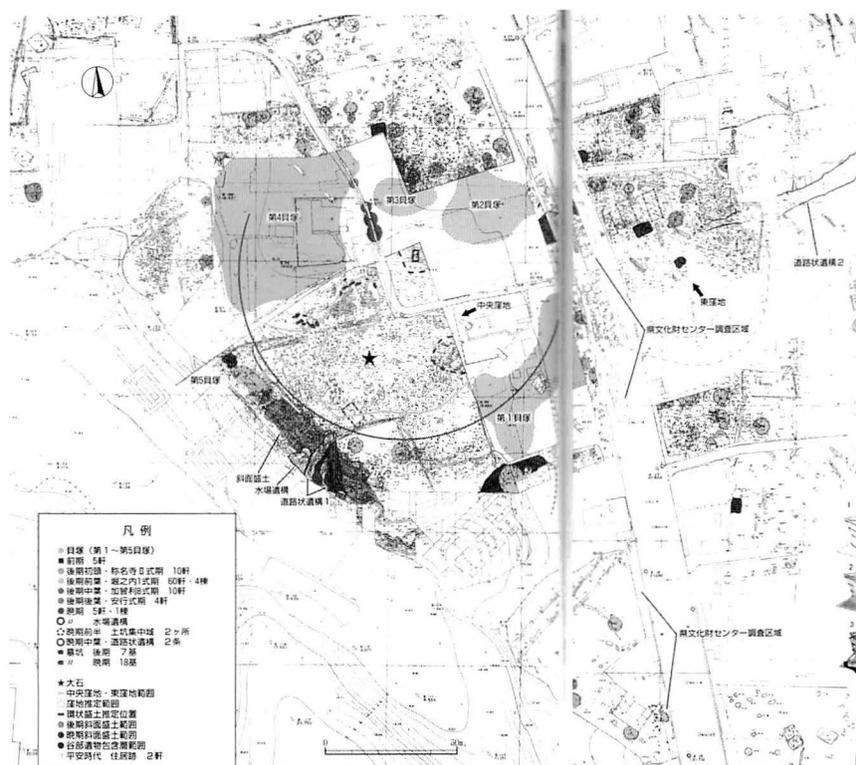


図5 三輪野山貝塚全体図 (小栗ほか 2008 から転載)

より住居の環状配置を可能としている。

しかし、称名寺Ⅱ式期・堀之内Ⅰ式期の住居は環状範囲に属さないものがある。

後期に貝塚の形成および斜面盛土を行っている。晩期前葉に造営される環状盛土の一部開削による道路状遺構は、三直貝塚の丘陵尾根の切断時期と同じであり、晩期前葉に遺跡の性格に

変化が起こった可能性が窺える。

東窪地内には、前期の住居や後期称名寺Ⅱ式期・堀之内Ⅰ式期・安行式期の住居が残っているため、中央窪地においても存在した可能性がある。

(5) 上宮田台遺跡 (千葉県袖ヶ浦市)

沖松信隆 (沖松 2005) によると、中央窪地の全域が調査された例である。堀之内Ⅰ式期から集落が形成され始め、加曽利 B 式期ないし曾谷式期にかけてある程度連続して遺構が構築されたと考えられている。後期前半から中葉を含む遺構群は窪地の内部にも占地している。住居跡の壁は検出されず、遺構の直上まで晩期の遺物包含層が堆積していたことから、後期の遺構群は晩期までのある時期に削平されたと考えられている。さらに、堀之内Ⅰ式の段階では、現状の窪地は存在しなかったか、あるいはより狭い範囲であったことが想定されている。斜面への盛土と整形は貝層の形成と合わせて、少なくとも加曽利 B 式期から行われている。後期安行式の頃の土地利用については不明である。晩期安行 3a 式期から安行 3b 式期にかけて、窪地西側から北部において遺構が構築され、北側斜面には盛土で壁を形成したとみられる (盛土を掘り込んだ) 安行 3b 式期の竪穴住居跡を検出している。窪地西側には盛土形成が想定され、窪地内遺物包含層の最下層には晩期中葉の遺物も含まれる。窪地の最終形態は後期の集落を削平して人為的に作られた可能性が高く、北側斜面のローム土のあり方も短期間の堆積を裏付けるものであろう、としている。

(6) 馬場小室山遺跡 (埼玉県さいたま市緑区)

鈴木正博 (鈴木 2007) によると、縄紋式草創期後葉「撚糸紋系土器群」から晩期終末「千網式」までの殆どの「土器型式」が濃淡を有して確認されている。長期継続型の拠点集落遺跡であり、「拡大窪地」とそれに関わる「土塚」、並びに「多世代土器群多埋設深掘大土塋」の存在が特徴であり、集落の動態として同じ空間利



図6 上宮田台遺跡遺構分布図 (沖松 2005 から転載)

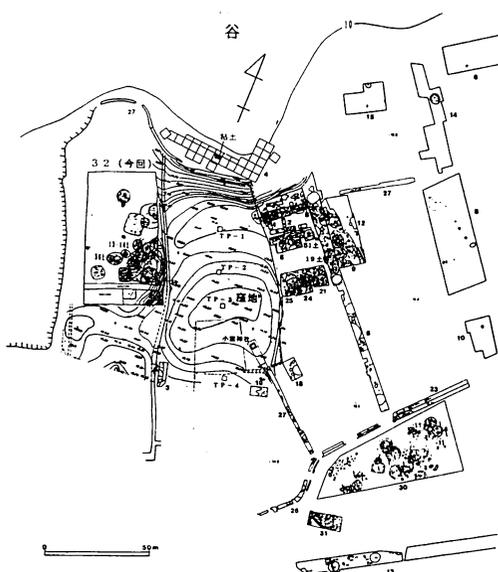


図7 馬場小室山遺跡全体図（鈴木2007から転載）

用において、中期集落から後晩期集落にかけて徐々に縮小していく推移が明瞭とされている。5基の「環堤土塚」は、縄紋式集落が廃絶されたままの状態と考察されている。5号土塚は安行3c式頃に終焉を迎えるが、1号土塚・2号土塚・拡大窪地の文化層は安行3d式を終末とする等、晩期中葉まで継続している状況が確認されている。平面調査された2号土塚（長さ30m、幅20m、高さ1.5m）は、遺構の密集度（住居址は中期9基、後期7基、晩期6基）が高く、頂部には安行3c・d式の文化層が顕著にみられ、その周囲約1,000平米からは、後晩期特有の祭祀装置である土偶（約30点）、土版（15点）、土製耳飾（約80点）、石棒・石剣（約50点）、独鈷石（2点）などを含み、大量の資料が検出された。5号土塚では多量の石鏃が僅かな面積に集中して検出された（青木1990）。

「環状土塚」の集落構成としては「多世代土器群多埋設深掘大土壙」と呼ぶべき「第51号土壙」の役割が重要であり、安行3a式から始まり安行3d式までの完形あるいはそれに近い土器群が一括で検出されており、多世代の集落

運営制度として注目すべき現象である、としている。

3 性格理解のための解釈

(1) 縄文時代後晩期の住居構造による盛土形成の可能性

なぜ、遺跡の最終形態に円墳上の高まりがあるのか考えることが、環状盛土の理解につながる。盛土が形成される過程は生活面の累積かもしれないが、最終的な円墳状のマウンドは住居廃絶後、自然に形成されたのだろうか。この答えは、縄文時代後晩期の住居構造がわからないと説明し得ないものである。阿部は土壁家屋の住居の土壁が盛土の成因と考えている（阿部1996）が、これが屋根まで土を被せた土屋根の住居構造だったらどうだろうか。縄文時代中期の岩手県御所野遺跡や福島県宮畑遺跡、富山県北代遺跡、北海道入江貝塚等の堅穴住居跡は、焼失住居の調査例から土葺き屋根に復元されており、外観はマウンド状を呈している。しかも、堅穴の掘り込みの浅い住居だったら廃絶後の土屋根の崩落によって低いマウンドが形成され得るものとする。

では、土屋根構造の堅穴住居の廃絶、建設の繰り返しだけで「環状盛土遺構」が形成されるのか、という問題を考えたい。

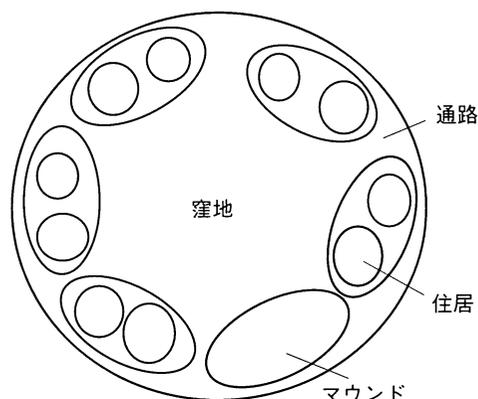


図8 分節構造マウンドのイメージ

この理論でいくと堅穴住居の累積による高まりを形成するには、客土の存在が不可欠である。掘り上げた土以上のものがないと嵩上げは期待できない。屋根に葺く土は粘性のあるものを使用したと考えられるため、関東地方の台地上においては、ローム層起源の土が使用されていたと想定される。

しかし、堅穴住居の基本形が土屋根構造でその累積によってマウンドが形成されるとしたら、なぜ、他の時期の住居跡密度の高い遺跡にマウンドが形成されないのか疑問が残る。これを縄文時代後晩期特有の志向とみれば、「環状盛土」は意志を持って形成された「遺構」としなければならぬ。

(2) 遺跡の二重構造

遺跡の性格が後晩期のある時点で変換されたとする解釈である。前述した井野長割遺跡の戸谷の指摘（戸谷 2004）にもあるように、台地の広域に広がる集落から中央窪地の掘削を伴う、縁辺部を高まりとした環状祭祀場への転換である。環状盛土内側にみられる晩期の堅穴を伴わない建物は祭祀用のものであると想定することもでき、縁辺部の建物は、祭祀を司るリーダーの住居やゲストハウスを含むものと想定する。集落から祭祀場への転換期が三直貝塚でみられたマウンドの開削による道の設置とマウンドのブロック化を契機とすると考える。周辺集落から集まった人々は、中央窪地で執り行われる祭祀に参加し、ここで、遠隔地からの石材や貝などの品々の分配を受けたりする。これが、環状盛土遺構を有する遺跡の姿であると考えられる。

また、マウンドのブロック化は環状集落の分節構造（谷口 2005）から理解できる可能性もあると思われる。全面調査の例が乏しいため、今後の適正な調査に期待したいところであるが、三直貝塚の調査例をみると、ブロック化したマウンドには、後期から晩期に長期間建て替えを経て同じ位置に継続する大型建物が附随する。この存在がキーポイントとなることを指摘して

おきたい。分節構造を持つ拠点集落の形成される背景については、複雑化した社会の維持体制の反映と思われ、分節マウンドの数は、血族系統の数を反映していると考えられる。そもそも拠点集落は地域の交易センター、祭祀センターとして単一血族のみで構成される小さな集落の上位に立ち、いくつかの異なる血族で構成される大きな集落であると考え、対外的な交易権や祭祀の執行権を持つ部族長が存在した可能性を考えたい。縄文時代後期以降の集落形態について、日本列島のほぼ全域で、それまで集落内や集落周辺にあった墓地や祭祀場が独立するようになる（泉 2007）との指摘があり、配石遺構、配石や石棺墓を含む墓地遺跡、環状列石や環状木柱列、周堤墓などを例示している。この傾向からも環状盛土遺構を有する遺跡は、単なる継続する集落ではなく、祭祀場が上に重なって独立したのだと考え得るものである。

(3) 環状集落との関連性

堀越正行は、中期の中央窪地型環状集落は、横・下・穴埋め志向で水平的構成をとり、後期の環状集落は、横・上・積み上げ志向で累重構成をとることを指摘している（堀越 2007）。

堀越によると、東京湾沿岸下総台地では、縄文時代中期中・後葉の集落は、既にあった窪地地形を好んで選定していた。中央は空白部とし、その周りを貯蔵穴、さらにその周りに堅穴住居を巡らすものであり、貝殻などの食糧残滓、壊れた土器などの道具、そして死者までも、住居・貯蔵穴帯の堅穴住居跡などの窪みを中心に廃棄・埋葬していた。堅穴住居廃絶後直ぐに埋め立てるという行為が一般的ではなかったことを意味する。住居の更新は、横・内側方向に展開し、そして深く掘り下げることが普通とされていた。その結果、生活を続けても、次第に高まりが形成されていくということはなかった。穴埋め志向は著しいが、積極的な嵩上げ志向は、殆ど認められない。中期の貝塚で嵩上げ志向が顕著な例は加曽利北貝塚のみ、あくまでも貝殻を主体

とした堤であり、当時において例外的特殊行為である。

これに対し、後期になると横・上・積み上げ志向の環堤集落が出現する。窪地周辺の高まりを利用し、その高まりの上で主体的な居住生活（掘削－埋め戻し－整地－廃棄）を続けた結果であるとし、「環状盛土遺構」は、この環堤集落の一種であると考えられている。中央部を掘削して窪地を作り、削った赤土の目立つ環堤集落が寺野東遺跡・三直貝塚・井野長割遺跡であり、中央窪地に由来しない黒土が主体の環堤集落が曲輪ノ内貝塚（薄い層）・馬場小室山遺跡（厚い層）であるとしている。

このことから、後期の「環堤集落」の累重構成の意味するものを考えると、中期と異なり最初から中央広場スペースを厳格に確保し、維持し、中央窪地の厳格な建物規制とともに居住域の規制が働いていたことを読み取ることができる。堀越の指摘する後期の環堤集落は、横・上・積み上げ志向による累重構成をとることの背景は、厳格な居住規制であると解釈するものである。

しかし、三直貝塚等にも、晩期に「環堤」内側に入り込み、水平方向展開する建物は、どう説明するのか考える必要がある。筆者はこのような規制解除は、前述した遺跡の性格の転換を意味するものと考え、環状盛土遺構を有する遺跡の二重構造性を裏付ける根拠としたいと思っている。

中央窪地部分の遺物の出土状況も特徴的である。遺物包含層の最下層及び地山の直上に遺跡で最も新しい時期の遺物が存在することは、その時期以前まで自然堆積する状況になかったことを意味するものである。窪地自体が自然地形占地によるものであったとしても、窪地への関わりは極めて人為的である。環状盛土部分が累積の堆積を示すすれば、窪地部分も自然堆積により遺物包含層が年代的に形成されるはずである。この堆積状況が崩れている以上、窪地部

分及び環状盛土部分に人為的な土の移動を伴う行為がなされていると指摘せざるを得ない。

(4) 用語の整理と分類上の位置付け

環状盛土遺構の用語自体の名称の問題と環状盛土遺構を有する遺跡の分類上の位置付けをすることで性格を説明しようとするものである。

これまでの用語の使用例は、環状盛土遺構、環状盛土、中央窪地型環状集落、中央窪地型環堤集落、谷奥型環状遺丘集落、環堤土塚、環状土盛などがある。遺跡の性格としては、集落、祭祀遺構、記念物がある。

整理すると、遺構レベルで表現したものは、環状盛土遺構、環状盛土、環状土盛、環堤土塚であり、遺跡レベルで表現したものは、中央窪地型環状集落、中央窪地型環堤集落、谷奥型環状遺丘集落である。これらを順に検討して行く。

まず、遺構か遺構ではないかという問題は、単に副次的にできたものではなく、意識を持って形成されていると認められた場合、遺構であると認定される。

盛土か、盛土ではないかという問題は、人為的に造成した土が認められれば、盛土であると認定される。また、盛土ではなく、地山整形によるマウンドの造成をどう表現したらよいか、検討を要する。例えば、「古墳」は古墳時代の墳丘墓を意味するが、墳丘は盛土整形であったり、地山整形であったりするので、造成方法までは問わない命名である。

土塚は、土でつくられた高まりというイメージになる。

環状か環堤かは、環状が単に平面的な形態表現に対し、環堤は立体的な形態表現となる。

中央窪地型は、他の型式の存在があつて効果のある分類であるため、同種他型式の遺跡を含めた分類基準を設定する必要があると思われる。

谷奥型は、谷面並列型とともに立地による分類に基づく呼称なので理解できるが、「谷奥型環状」、「谷面並列型」は、「谷奥環状型」・「谷面並列型」または「谷奥型環状」・「谷面型並列

が正しい呼称方法だと思われる。

遺丘は、検討を要する用語である。阿部芳郎が提唱する用語（阿部 1996）で、西アジアに存在する「テル」＝「遺丘」を、住居が累積したために結果的にできた人工的な「丘」という意味で使用しているが、西アジアにおいてなぜ居住域の累積が「テル」＝「遺丘」になるかといえば、家屋構造が日干しレンガを使用した壁建ちの建物のため、崩れれば日干しレンガが風化しながら堆積し、それを整地してまた建物を建てるため、丘になっていくからであると認識している。縄文時代後晩期の家屋構造において、盛土状に累積するだけの土が使用されていたのだろうか。また、阿部は関東地方の竪穴住居のプランが、ちょうど盛土の盛んな後期中葉の時期を境にして円形から方形に変化していることを指摘し、壁土や建物の構築材として土が利用されることと、真っ直ぐな壁が方形に居住空間を囲うという現象は無関係ではないだろう（阿部 1996）としている。理論的に住居廃絶後の地盤が盛り上がるのは、竪穴の掘り込みの容積よりも壁土の土量が多くなければならない。次に用例として「テル」＝「遺丘」は、エジプトのデル・エル・バハリやデル・エル・アマルナ、イラクのテベ・ガウラ、イスラエルのテル・アビブ等が想起され、特定の文化を規定する用語や現象ではない（阿部 2007）とされている。また、「遺丘」というのは古い用例であり、「環状盛土」のイメージおよび概念状でも共通とは言えない。というのも、「環状盛土」の成因が、遺構の累積、地山の整形、盛土といろいろあるからである。

遺跡の性格としての分類である集落、祭祀遺構、記念物については、集落でもあり、祭祀遺跡でもあるが、環状盛土自体が祭祀遺構であったり記念物であったりするかは、判断できない。しかし、現代において、その存在は環状貝塚とともに縄文時代の記念物と化していないだろうか。

盛土にせよ、遺構の累積にせよ、地山の整形にせよ、結果的に窪地を取り囲んだ高まりを形成する遺跡の形態があり、一部に貝層を有すが、貝殻で築いたマウンドはない。遺跡の分布は、大規模貝塚の密集地域よりも内陸部に位置する。

遺跡の分類上は、生活遺跡（集落）、原始的祭祀遺跡（祭祀遺物の大量出土）、墓地遺跡（土墳墓）が複合し、全体的には集落内の領域と時間的変遷で捉えるべきではないかと考える。

よって、環状盛土遺構を有する遺跡は、後期の集落と晩期の祭祀場を含む分節マウンドを形成した累積的性格変遷を遂げた集落の複合遺跡として解釈できるとと思われる。

4 おわりに

「環状盛土遺構」とは、環状に廻る分節構造マウンドであり、環状盛土遺構を有する遺跡は、後期から晩期に継続し、性格転換する生活遺跡、祭祀遺跡であり、特に集落と祭祀場の二重構造をもつ遺跡である。環状の高まりの形成要因は土屋根構造の家屋の崩落、尾根の切断による地山整形、窪地掘削土による盛土であり、人工的の形成要因が認められる以上、窪地を取り囲み、窪地と周囲の比高を志向した「遺構」であると解釈できる。

環状盛土遺構の形成過程の一般化および普遍化は必要ではなく、形態にこそ意味があるのであって、分類の作業はその視点に立って行われなければならない。その意味では、盛土という表現は必要十分条件ではないので遺構名としては的確とは言えない。

例えば、かつて周堤墓は、環状土籬と呼ばれていたが土籬という表現は、外と内との境界性を持ち、非常に良い表現である。この環状土籬に匹敵するような名称が望まれる。よって、現時点では「環状分節マウンド」と名付けておきたい。

住居の累積による高まりを形成する集落の一類型であるとの解釈は、遺跡の内容まで踏み込

んだ的確な解釈とは言えない。

最終的な形態での遺跡の性格は、祭祀場である色彩が高く、その前段階としては、集落である。しかも、環状盛土遺構の形成は、断続的にせよ中期から継続する拠点集落にみられる現象であり、遠隔地の遺物の出土は、交易センターの役割も担っていたものと思われる。このような構造を想定することで遺跡の形成と祭祀的遺物や土器の大量出土を説明できると考え、定住性の高い狩猟採集民のセトルメントシステムの中で考えていく方向性を取りたい。

引用・参考文献

- 勅使河原彰 1995 「ケとハレの社会交流」『縄文人の時代』新泉社
- 小林達雄 1995 『縄文時代における自然の社会化』雄山閣出版
- 小林達雄 2008 『縄文の思考』筑摩書房
- 阿部芳郎 1996 「縄文時代のムラと「盛土遺構」—「盛土遺構」の形成過程と家屋構造・居住形態—」月刊歴史手帖第24巻8号
- 阿部芳郎 2001 「四街道市八木原貝塚の基礎的研究～内陸地域における縄文後期主鹹貝塚の形成とその意義～」『四街道市の文化財』第25号
- 阿部芳郎 2005 「加曾利南貝塚における貝塚形成過程と集落展開」『貝塚博物館紀要』第32号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 阿部芳郎ほか 2006 特集「環状盛土遺構」とは何か 月刊考古学ジャーナル No.548
- 阿部芳郎 2007 「縄文後晩期の集落構造—「谷奥型環状遺丘集落」と「谷面並列型遺丘集落」の占地と展開—」『「環状盛土遺構」研究の現段階—馬場小室山遺跡から展望する縄文時代後晩期の集落と地域』「馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム」実行委員会
- 鈴木正博 1994 月刊考古学ジャーナル No.375
- 鈴木正博 2007 「「環状土塚」と馬場小室山遺蹟、そして「見沼文化」への眼差し」『環状盛土遺構』研究の現段階—馬場小室山遺跡から展望する縄文時代後晩期の集落と地域』「馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム」実行委員会
- 堀越正行 1995 「中央窪地型馬蹄形貝塚の窪地と高まり覚え書き」『史館』26
- 堀越正行 2007 「「環状盛土遺構」以前の集落の立地と構成」『「環状盛土遺構」研究の現段階—馬場小室山遺跡から展望する縄文時代後晩期の集落と地域』「馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム」実行委員会
- 江原 英 1997 『寺野東遺跡Ⅴ』財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 江原 英 1999 「寺野東遺跡環状盛土遺構の類例—縄紋後・晩期集落の一形態を考える基礎作業—」『研究紀要第7号』財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 江原 英・初山孝行 2007 『寺野東遺跡』日本の遺跡23 同成社
- 吉野健一 2006 『東関東自動車道（木更津・富津線）埋蔵文化財調査報告者7—君津市三直貝塚—』財団法人千葉県教育振興財団
- 田中大介・小倉和重 2004 平成15年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書 井野長割遺跡（第8次）佐倉市教育委員会
- 田中大介 2004 「井野長割遺跡における環状盛土遺構について—「シンポジウム『井野長割遺跡を考える』～環状盛土をめぐる～」の補足を兼ねて—」『財団法人印旛郡市文化財センター研究紀要』4 財団法人印旛郡市文化財センター
- 戸谷敦司 2004 「環状盛土遺構私見—井野長割遺跡第4次調査の整理を終えて—」『財団法人印旛郡市文化財センター研究紀要』4 財団法人印旛郡市文化財センター
- 小倉和重 2006 「環状盛土遺構研究の一視点—「中央窪地型集落」の提唱と馬蹄形貝塚との比較」『佐倉市史研究』第19号 佐倉市
- 小栗信一郎・小川勝和・宮川博司 2008 『三

- 輪野山貝塚発掘調査概要報告書』流山市埋蔵文化財調査報告 Vol.40 流山市教育委員会
- 沖松信隆 2005 「袖ヶ浦市上宮田台遺跡の縄文時代後・晩期集落について」研究連絡誌第67号 財団法人千葉県文化財センター
- 沖松信隆 2005 「縄文時代後・晩期集落における中央窪地の形成について」研究紀要24 財団法人千葉県文化財センター
- 鈴木正博 2007 「馬場小室山遺蹟－集落構成としての「環状土塚」と「第51号土城」」「環状盛土遺構」研究の現段階－馬場小室山遺跡から展望する縄文時代後晩期の集落と地域』「馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム」実行委員会
- 青木義脩 1990 「浦和市馬場小室山遺蹟出土の石鏃」『考古学雑誌』第76巻第2号 pp.63-75 日本考古学会
- 谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』学生社
- 泉 拓良 2007 「Ⅱ-5 定住と集落」『考古学の基礎知識』角川選書 409